スーザン・ウォーナー『広い，広い世界』

―ベストセラーの要因―

姜 福 順

スーザン・ウォーナーは19世紀におけるベストセラー作家のひとりであり，彼女の代表作である『広い，広い世界』(1850) は，19世紀におけるベストセラー本のひとつである (Foster 35)。この事実は，1970年代まで男性中心的な価値観が蔓延していたアメリカ文壇のなかで，女性作家による作品は質的にも男性のそれに劣るなどという不可解な見解により排除されつづけてきた。

ウォーナーが執筆活動をした時代は，同時代に活躍していたナサニエル・ホーソンが，女性作家の活躍のために彼の作品が売れず嘆き，彼女たちに対し「いたずら書きをする低俗な女の集団」(Hawthorne 304) と散々な皮肉をもらしたことからも窺えるように，女性作家が多く世に出た時代である。『アンクル・トムの小屋』(1852) のハリエット・ビーチャー・ストウもそのひとりである。

現代においてウォーナー研究は，作品の出版から約半世紀にも及ぶ空白を埋めるべく，多くの批評家たちにより積極的に研究されている。研究の傾向は幅広く，作品を通し当時の時代性を追求するもの，またニーナ・ベイムのように，作品のストーリーに重点を置き，19世紀に多く読まれた，女性の試練とそれに打ち勝つ女性の物語としての「女性小説」(22)[1] として定義付けし，ジェンダー研究的側面から研究しているものなどがある。

このように様々な研究が成されているが，これらすべての研究の根本にあるのは，ベストセラー本であったという事実である。ここで改めてなぜ

この作品がベストセラー本をして多くの読者を魅了したかという問いについて考察してみると，これまで研究されているベストセラーの要因としては，第 1 にそれが教会における日曜学校のテキストとして推薦されたということが挙げられる。作品が出版された 19 世紀中葉は，宗教家たちによる宗教復興が盛んに叫ばれていた時代である。女性の美徳の真髄として崇拝されていた宗教観を軸に，聖書のフレーズを幾度にも及び引用し，「人生の教科書」としての『聖書』を世に広めた『広い，広い世界』が，宗教家たちの心を掴むのにそう時間はかからなかったようである。彼らは作品を大いに賞賛し，自らの教区において大量に作品を発注させるという結果を招いた (Kim 33-34)。

次の要因としては，出版業界における本の宣伝が功をそうしたことが挙げられる。作品が出版された 1850 年代においては，どの出版社においても，本の売上げ部数の行方は，宣伝の良し悪しで決まるということが通説となっていた (Mott, BS 294)[2]。したがって，どの出版社も積極的に本の宣伝に乗り出し，おおよそ本 1 冊の売値あたり，12 パーセントから 16 パーセントが宣伝費として使われたとされている (Geary 374)。

たとえば，作品が出版された 2 ヵ月後，1851 年 2 月号の『ゴディーズ・レディーズ・ブック』では以下のように宣伝されている。

> 『広い，広い世界』，エリザベス・ウエザレル[3]著。全 2 巻。この作品は，丁寧かつ自然に書かれており，どのページにおいても，過剰な感傷の描写における大げさな言葉により読者を魅了しようとするよりも，現実世界における有益な教訓を教え込もうとする作家の熱意が込められている。(202)

さらにある新聞においては，「このような本は一世代に 1 冊あるかないかの本」(Papashvily 2)，そしてまたある新聞では，「聖書を除いて，どの本よりも良い影響を与え得るもの」(Mott, BS 123)，などと出版界がこぞって作品を賞賛した。

以上述べた要因は，当時の社会性と密接な関係にあり，現在では多くのウォーナー研究者たちに定着している要因である。しかし，要因はこれだけであろうか。これらの要因はあくまで外的要因に過ぎない。作品がそこまで売れた背景には外的要因のなかに存在する内的要因が存在していると考えられはしないであろうか。

ヒロイン，エレン・モンゴメリーの波乱万丈な人生を通し，女性のあるべき姿を示した『広い，広い世界』は，19 世紀を生きた多くの女性たちにいかにして女性として生きてゆくべきかということを教訓的に指示した作品である。あえてこのような作品が多くの読者たちに絶大な支持を受けた要因には，宗教家たちの支持や出版社による宣伝効果以外に，その内容や当時の時代性にも大きな要因が隠されているのではなかろうか。

バーバラ・ウェルターの研究によれば，19 世紀という時代は，文化の中心が家庭となったことにより，そこを「適切な領域」とされた女性の存在が重要視された時代であると述べている (151)。ウェルターの研究によれば，当時，社会的に良しとされた女性は「真の女性 (true woman)」と称され，彼女たちは「敬虔さ (piety)」「純真さ (purity)」「従順さ (submissive-ness)」「家庭的さ (domesticity)」を兼ね備えた女性であることを，社会的に求められていたとしている (152)。さらに彼女は，この理想とされた女性像は，女性のあるべき姿を端的に示した「エチケットブック」や，女性を主人公とした短編小説などを通し，また理想の女性像を宣伝した「雑誌」，そして「宗教的な小説」などにおいて明らかにされたとしている (151)。

ウェルターの示す，これら 3 つの真の女性像を浸透させたとされる媒体は，19 世紀アメリカの特徴とも言える，国民識字率の上昇，機械化にともなう大衆の余暇の獲得，人口増加等によりもたらされた大衆文化の向上により，急速に大衆に浸透した（黛 229-31)。このような時代の最中に書かれた『広い，広い世界』が，爆発的に読者たちに支持を受けたという事実は，決して偶然的，かつ突発的なことではなく，何か当時の時代性，社会性とうまく絡み合っていたと考えられる。

本稿では，現代の批評家たちのなかで既に通説となっている外的要因を，

さらに確固たるものとするための裏付けとして，『広い，広い世界』よりも前に，1820 年頃より一般大衆に女性のあり方を示した「エチケットブック」，「雑誌」を分析しながら，その傾向と性質を明らかにし，最終的に『広い，広い世界』の内容を分析しながらベストセラーの内的要因を探ってゆき，これまで述べられている外的要因と統合させ，ベストセラーの要因を再考察してゆく。そして，売れたことの意義の明確化をも試みたい。

I

『広い，広い世界』のベストセラーの要因を明らかにする上で，その結論を導くすべての基盤として，まずこの作品が出版された 19 世紀という時代がいかなる時代であったかということと，それが男女にいかなるかたちで影響したかを明らかにして見たい。

19 世紀アメリカは，男女の「適切な領域 (proper sphere)」が重要視された時代である。「適切な領域」とは，男女それぞれに与えられた社会における活動領域であり，家庭を中心に男女の役割を明確化した。

この価値観は一見，人々を階級別に分けることなく，生産にたずさわる人々を一括して，「真の人民」と定めたジャクソニアン・デモクラシーの最中，男女それぞれに「平等」に役割を与えたように見える (Schlesinger 16-17)。だが，この概念構築により，男女はまったく別のものであるとしてとらえられ，男性中心的価値観から，男性を優位な存在であることを定義づけ，男女間に優劣の意識を植え付けるという結果を生むことになった。また，領域において男女がそれぞれいかに行動すべきかという点を明らかにし，男女の「理想像」を作り上げた。19 世紀以前にも男女の領域は漠然と存在していたが，後進農業国から世界の主要な経済大国となるための基盤を整えはじめていた 19 世紀アメリカ社会においてこの「適切な領域」という価値観は，社会の秩序を保つために重要視され，細かく定義づけされた。

「適切な領域」は家庭を中心にその外と内に区切られ，男性には外，そして女性には内という活動の場を与えている。この外と内を区切る境界線

は，男女に与えられた「幸せの終着地」の違いから顕著に表れている。

男性の幸せの矛先は，「国家の繁栄」であった。独立戦争後，大衆のなかで共和国国民としての意識が高まるなか，男性にとっての自らの国家に対する愛国心のかたちは新生国家の繁栄であった。1827 年以降の教育改革により，学校教育において男性は国家の創造者となるための学問を積極的に学んだ(Gutjahr 119)。国家の繁栄こそ男性にとっての愛国心の表れであり，国家に支えることこそ彼らの幸せであると考えられていた。

たとえば「男性のあるべき姿」を示した，宗教家，ウィリアム・オルコット著の『ヤングマンズガイド』(1835) では，男性の幸せへの近道は，高い志を持ち，国家憲政においてすぐに役立ち，自立した人間になることであると述べられている(1)。この本は読書が，大衆に浸透しきれていない 19 世紀初頭に出版されたのであるが，同時代に出版された，現代において，19 世紀のベストセラーのひとつとして知られている，ジェイムス・フェニモア・クーパーの『最後のモヒカン族』(1826) とほぼ等しく，出版から数ヶ月で 5000 部を売り上げたということは(Hart 81)，自ら知識人であると認識する男性たちの間において，彼らの日常生活における立ち振る舞いがいかに重要視されていたかを窺うことができる。

一方，女性の幸せは，家庭における彼女たちの影響力により築かれる「家庭の平穏」であるとされていた。19 世紀は，男性の「協力者 (help-meet)」(Mond 19) としての妻，そして国家の未来の担い手を育てる「共和国の母 (republican mother)」(Bloch 47) としての女性像が重要視された時代である。家庭においていかに夫に従属し，将来の国家の担い手を育てるかにより，女性の存在価値が決められた。「女性の男性に対する影響力こそが，社会の秩序とモラルを組み立てる力を与える」(46-47) というように，外で働く男性に代わり家庭を守り，内助の功をおさめることこそが，国家の明日の繁栄を導くとされていた。

このような背景に付随し，19 世紀に入ると「理想の女性像」は明確化し，女性の「敬虔」「純真」「従順」「家庭性」が重要視されるようになった。しかし，ウェルターが，この判断は男性と周囲の人々たちにより決められた

(152) と述べているように，この「理想の女性像」は，女性が個の人格として，「自分らしく」生きることを阻む結果を招いている。

教育もそれにならい進められた。男子教育に足を並べるように，19 世紀に入り女子の学校教育も積極的に行われるようになった。女子教育においては，家庭における女性のあり方を重点的に教え込んだ (Plante 5-7)。たとえば，現代ではアメリカにおける女子大学の名門のひとつとして名高い，マウント・ホリヨーク (Mt. Holyoke) は，まさにこの時代に創設されており，当時の入学案内では，「キリストの侍女として，刷新するこの世の偉大な任務において有能な補助者」(Welter 153) として邁進させることを約束している。

また，女性のあるべき姿を描いた『広い，広い世界』においては，女性の最高の幸せは「家庭」にあり，「保護者」としての男性の「所有物」として養われることであることが，再三述べられている。作品は，「欠点だらけ」(WWW 13) ととらえられているヒロイン，エレンが，「小さな巡礼者」(354) として，善良なキリスト教徒となるための，苦難だらけの巡礼の旅の果てに，最終的に「家庭」という当時の社会が神聖化していた場所にたどり着くまでの道程を綴った物語である。作品では孤児となり，いくつかの家庭において「疑似家族生活」を経験するエレンの体験を通し，いかなる「家庭」が理想的であるかを明確に表わしている。

> エレンが目覚めたとき，目のなかに朝日が燦々と，そして強く差し込んできた。周りを囲むすべての見慣れないものに戸惑いながら，ひじに身を置き，新しい家をしばらく眺めた。気持ち良さを隠し切れなかった。窓から差し込む強い朝の木漏れ日は，無色で殺風景な壁と羽目板に，それらの美しさの欠乏を補うなうかのように，反射していた。…部屋はちょうど良い広さであり，完璧に整理整頓されており，(さらに幸いなことに) 東側には毎朝，朝日を通してくれるふたつの大きな窓があった。しかし床にはじゅうたんはなく，何もない棚はエレンにはとてもわびしく見えた。(WWW 101-02)

エレンがニューヨークから遠くはなれた田園地帯のサールウォールに移った翌日，叔母であるフォーチュン・エマソン邸の，彼女の部屋を描写したこの部分では，自然に囲まれ，目覚めの良い朝を迎えたエレンであるが，ふと部屋を見回したとき彼女のなかに「わびしさ」が生じる。自然の生き生きした描写とエレンの憂鬱な気持ちのコントラストは，彼女の寂しさを一層引き立てている。つまり，フォーチュンの家庭は彼女には適さない場所であることを示唆しているのである。

> 小さな家族が食卓に着いたとき，木の壁には陰がかかっていたが，その背後にはまだ日がかかっている風景があり，さらに食卓にはもうひとつの光がそれを囲むそれぞれの者の顔に溢れていた。太陽は遠くの草原と丘に去っていき，やわらかな薄明かりが森のなか，峠のした，そして平野の上を覆っていった。 (WWW 405-06)

これは，エレンを信仰の道へと導く役割として存在しているハンフリー家における場面である。時刻は夜も近い夕暮れ時である。日も暮れ始めているにもかかわらず，エレンをはじめ，食卓を囲むものたちの表情は幸せに満ちている。そして「小さな家族」(WWW 405) を囲む自然環境はとても「やわらかな」(406) 雰囲気をもっている。

さらにそこで，エレンは尊敬するジョン・ハンフリーに「おまえは私のものだよ」(WWW 407) と言われている。ハンフリー家において，エレンは自分が頼るべき存在と出会う。エレンはジョンの言葉を当然のように受け入れ，安堵感を得る。信仰に満ち，女性が頼るべき男性がいるハンフリー家は，「理想的な家庭」として存在している。作品においてふたつの家庭の描写は，対照的な場所として描かれているということは言うまでもない。

孤児となり自分がいるべき「家庭」を失ったエレンが，最終的にたどり着く「自分自身の家庭」は，彼女が自分自身の「領域」を獲得したことを意味する。その領域とは，善良な真のキリスト教になった彼女への「ごほうび」として与えられているものである。

作品が，エレンが家庭にたどり着く場面で幕を閉じているということは，女性の幸せの終着地は「家庭」以外の何ものでもないことを示唆している。つまり，「すべての面におけるたった 1 つで忠実な人生の教科書」(WWW 532) である聖書の教えに従い，キリスト教徒になり，男性に選ばれ結婚することが女性の唯一の幸せであることを暗示している。

また，この作品において家庭は，社会の中心として描かれており，さらに女性の仕事場としても描かれている。その一例としては，フォーチュンと，彼女の婚約者のヴァン・ブラントにそれぞれ与えられた仕事が挙げられる。

フォーチュンは，自らの家の力仕事をする役として雇っているヴァン・ブラントに決して家事をさせることはない。彼には主に家畜の世話と，その他外での力仕事が与えられている。経済的にも決して苦しいとは思えないフォーチュンであるが，家事は当然のように彼女の仕事としてとらえているようである。彼女が決して男性の介入を許さない家庭における仕事から，女性の仕事場としての家庭のイメージをとらえることができる。

19 世紀においては，『広い，広い世界』のように，男性によって養われることを女性に与えられた当然の権利として受け止め，その男性を崇拝し，「家庭の天使」として存在することを良しとするたぐいの小説が多く出版され好んで読まれたようである。

その裏づけとしては，決して結婚という結末にこだわらず，あくまで自立する女性のサクセス・ストーリーを描いた，19 世紀における女性初のジャーナリストと呼ばれるファニー・ファーンの『ルース・ホール』(1855) のヒロインから窺える。男性に依存せず，経済的自立を目標としているヒロイン，ルースの生き方は，結婚こそ女性の終着地であると，当然のように教育されてきた，多くの女性たちに，女性らしさにかける小説として非難された (Warren 54)。このような反響は，男性に依存する女性像が賞賛されていたかを，明確に物語っていると言える。

『広い，広い世界』の売上げ部数には到底かなわないにしろ，同時代のベストセラー本であるこの作品は，実に多くの読者に読まれたことは言う

までもない。だが，その主な要因は，1) 作品が当時ジャーナリストとして人気を博していた，作家自身の自伝的なものとして広く宣伝されたこと，そして 2) その中から，当時同じく，人気ジャーナリストとして人気を博していた実兄のナサニエル・パーカー・ウィリスの誌面では決して見ることのできない「意外な」素性を探ることができたという点が大きく作用し，内容の良し悪しはそれほど重要視されていなかったようである (Geary 388)。

これらのような例からも窺えるように，「女性のあるべき姿」は当時の社会の風潮として擁護されていた。妻，そして母親としての女性は，国家規模で称えられた。しかし一方で，それに背く女性は「落ちぶれた天使 (fallen angels)」(Welter 154) として，徹底的に非難を浴びたのである。

そのひとりとしては，幼いころからの英才教育が功をそうし，当時の女性にしては珍しく，ラルフ・ウォルド・エマソンを始め，男性と同等な立場で執筆活動を行った，マーガレット・フラーである。現代的価値観から彼女を判断してみると，幅広い才能をもつフラーは，今日ではそれを開花させる場所が存分に提供されているであろうが，女性であるが故に，女性の活躍の場が限られていた 19 世紀においては，彼女のような「賢明な」女性は敬遠されたようである。このような彼女に対して，『ゴディーズ・レディーズ・ブック』の編集長であったサラ・ヘイルは著書『女性名鑑』(1855) の中で，「彼女は進歩の道を誤った」(666) と直接的に非難しているほどである。

フラーの主張は，1845 年に出版された『19 世紀の女性』を見ても明らかである。彼女は，「自立」(17) を生涯の目的とし，女性たちにも同じ目的を持つことを促した。さらに彼女は，作品全体を通し，19世紀という時代は，「女性がひとり立ちできる時代」(96) であり，女性は望むことは何でも成し遂げられ，男女平等が成立する時代の幕開けであるとし，それを築き上げるのは女性の力量にかかっていると述べている。そのために女性がすべきことは，彼女たちが自分で考え，行動しなければならないと主張している (96-97)。

フラーにとって，これまでの女性は自分ひとりでは生きてゆけない依存的なものとして映っていたのであろう。女性の男性への依存性は19世紀には当然のこととしてとらえられていたのであるが，彼女はそれを真っ向から否定し，徹底的に女性の自立を訴えた。

フラー以外にも19世紀中盤には革命的な女性たちが多く存在した。『19世紀の女性たち』の出版から3年後の1848年の，アメリカ史上初の女性運動においてもヘイルは，彼女たちの「フェミニスト的」な行動は女性らしさにかけるとし，男性と同様，決して彼女たちを受け入れることはしなかった(佐藤36)。

さらに女性たちの社会に対する反抗は続き，『広い，広い世界』の出版と同じ年の1850年にも「自己啓発は自己犠牲よりもさらに高貴な任務である」と唱えた女性たちが存在した(Dobson 223)。しかし，世間が彼女たちに向けた目は冷やかなものであったようである。多くの人々は「やつらは一体何者なんだ」と完全に対立する姿勢を見せた(223)。結果，彼女たちは社会的に非難を浴び，彼女たちの唱えた主張は社会を揺るがすには至らなかった。

このように，反抗する女性たちの「誘惑」にも見向きもせず，ひたすら社会によって定義づけされた理想に女性像を崇拝した多くの女性たちは，19世紀が成した女子教育の「成果」であると考えることができる。教育により，女性たちは自らの居場所を確認し，さらに教育により家庭における女性像は神聖化され，崇拝されたのである。

しかしながら女性は男性に属し，男性よりも劣っている存在であるべきであり，それこそが女性の幸せにつながると，自らの性の劣等性を当然のように認め，男性にとって都合の良い広告塔のような女性たちは，19世紀において社会情勢に翻弄された最多の犠牲者たちであると考えられる。

II

ジェーン・トンプキンズは『広い，広い世界』は，これまで述べてきたような19世紀に体系化された価値観を「軟弱で権力に対して受身で，無垢な少女」(A 585)，エレンを通し具現化した「初期の指導書 (Ur-text)」(585) であると述べている。

事実，『広い，広い世界』は，権力に対し無力な女性がいかにその環境下において生きてゆくべきかという生存方法を伝授しているハウツー本としての特徴を持っていると言える。だが，ここで「初期」という表現に着目してみると，登場人物を明確に示し，誰にでも犯してしまいそうな失態を通し，そこから教訓的に女性のあるべき姿を明らかにしたという点においては，指導書としての役割は十分に果たしていると言える。しかし，物語という枠を外れ「指導書という範疇のみで考えてみると」，現実的に19世紀において女性のあるべき姿を示した指導書が存在していなかったと言い切るのは困難である。

1820年頃より「適切な領域」という概念が人々に浸透し始めたのは既に明らかであるが，この概念が少なくとも『広い，広い世界』が出版されるまでの約30年もの間，手付かずに置かれていたということはありえない。しかし，現代のようにテレビもラジオもない時代において，一体いかにしてこの概念は浸透していったのであろうか。

そのひとつとして「エチケットブック」が挙げられる。「エチケットブック」は『広い，広い世界』が出版される随分前に，箇条書きというスタイルで，男女に彼らの行動におけるハウツーを明確に指示した本である。

19世紀に入り，女子高等教育が積極的に行われるようになり，アメリカ国民のおおよそ9割が字を読み書きすることができるようになったのであるが (Okker 110)，これにより読書が大衆化し生活に密着するようになった。「エチケットブック」はその波に乗り，活字を通し人々にあるべき姿を教え諭した。

アメリカにおける「エチケットブック」の起源は，アーサー・M・シュレシンジャーによれば，17 世紀後半にさかのぼると言われているが (1-3)，さらに彼は 19 世紀に書かれた「エチケットブック」はそれ以前に書かれたものと少々主旨が異なるという分析から，それを「共和国のエチケットブック (Republican etiquette books)」(15) と改めている。

シュレシンジャーの研究によれば，19世紀以前に出版された多くの「エチケットブック」は，英国やフランスから輸入されたもので，君主制の価値観を支持するようなものであったとしている (21)。平等という価値観を支持した新生国家として，表向きは階級のない社会としてあったアメリカにとってこれらのようなものは不向きであったことは言うまでもない。

一方の「共和国のエチケットブック」は，大衆文化が一気に盛り上がった，ジャクソニアン・デモクラシーのもと，アメリカが共和国として自立しはじめた 1820 年代後半より，人々を共和国国民として教育することを目的に書かれたマナーブックである (Schlesinger 15-26)。それはこれまでのヨーロッパ的価値観をあからさまに賞賛し，露出していたものとは異なり，新生国家としてのアメリカが，独自に築き上げた価値観を中心に人々のあるべき姿を教育するために書かれたものである (21)。

教育を受ける対象は，新世紀に入り経済的に力を付け，経済大国としてのアメリカを支えた中産階級の人々であった。新生国家として生まれ変わった 19 世紀アメリカは，伝統やしきたりよりも，経済力がものをいった時代である。中産階級を軸とし，大衆の勢力がこれまでになく勢いを増していったジャクソニアン・デモクラシーにおいては，共和国のために働き，結果莫大な資産を手にした人物こそ新生国家にとっては有望とされ，賞賛され，彼らの言動は常に話題の中心となった。

彼らが目指したものは，これまで上流階級社会で培われてきたジェンティールとレディーとしてあることであった。新世紀の幕開けとともに，突然社会の中心として崇められ，注目された彼らであったが，彼らのイメージ通りの紳士，淑女として適切に行動することは困難であった。彼らは学校以外で気軽にそれを指示してくれる指導書を求めていた。そのような必

要に応じて登場したのが「共和国のエチケットブック」である。

「エチケットブック」は適切な領域にそって，男女のあるべき姿を明らかにしている。したがって，内容も男性用，女性用と明確に区別されている。言うまでもなく男性には，前章で述べた『ヤングマンズガイド』がその良い例であるが，国家の有能な創造者となるべくものとしてあるように指示し，女性には家庭を中心にそれを取り巻く社会における適切な振る舞いを指示している。

「エチケットブック」はとくに女性たちには重宝されたようである。家庭中心の文化として，これまでの女性が実感したことがないほど家庭における彼女たちの存在が注目された19世紀において，男性たちよりも彼女たちにとっていかに行動すべきかという問題は難題を極めた(Hart 87)。

「エチケットブック」に書かれた「過激に進歩的でもなく，また古くさくもなく，教養とたしなみ」(黛 238) は女性たちにレディーとして生きるための方法を明確に示した。学校教育や日曜学校などにおいても「エチケットブック」に書かれていることは教育されていたが，産業革命のあおりを受け，家庭にも機械が導入されることにより家事が軽減された女性たちは，時間が空いたときに「エチケットブック」を読むことで教会や学校以外の場所で気軽に道徳心を植え付けることができた。

このような女性のための「エチケットブック」の特色のひとつとして挙げられるのは，宗教観が非常に濃厚に反映されているところである。商売や国家建設に夢中になる余り，多くの男性に欠けているとされたモラルを補い，社会を明るくするという任務を任せられた女性たちは忠実にその任務をまっとうするために「エチケットブック」を読んだ。

宗教観をモラルの根源として主張している多くの「エチケットブック」は聖職者たちを中心とするモラリストたちが中心となって書かれたことは言うまでもない。彼らは，積極的に『聖書』と「エチケットブック」を結びつけ，「エチケットブック」を，『聖書』を理解させるための「第二の聖書」として位置付けた。

彼らがそこまで「エチケットブック」を尊重したのには理由がある。宗

教家たちを中心とするモラリストたちは，宗教の復興を賭け，宗教教育から機械的な教育へと導いていった「価値のない動因を掲示し，心無い自己主義に対し礼儀作法を教える小冊子（つまり宗教以外の教科書）」(Schlesinger 17) に対抗し『聖書』に次いで崇拝されるべき書物として，「エチケットブック」を積極的に出版したのである。そして，「エチケットブック」は「すべての純粋さと善良さ，つまりキリスト教徒の源泉」(19) として，女性たちによって崇拝されていた『聖書』の傍らに，「神聖な聖堂」として中産階級の家庭の中心としてあったパーラーのテーブルの上に置かれるようになったのである。

「第二の聖書」として書かれた「エチケットブック」はむしろ『聖書』を理解するためのもの，『聖書』に付随するものとして扱われたのである。つまり，「エチケットブック」は『聖書』の存在を人々に再確認させるために存在したと言える。

『聖書』と「エチケットブック」の関連性の裏付けとしては，1825 年に出版されたガーディナー・スプリングの『女性の性格のすばらしさと影響力』を見ても明らかである。

この「エチケットブック」においてはまず，「『聖書』はクリスチャン・ウーマンの責任と性格の掲示を決して省くことはありません」(Spring 3-4) というように『聖書』の存在を重要視しながら，そこに記されている教義にそって，女性のあるべき姿を明示している。そして，「私は女性に適した領域，そして神が女性に禁じた領域を知っています」(3) というように，社会によって定義づけされたとされる領域の概念を，宗教と結びつけ，女性と宗教とのつながりを不動のものとしている。

そして「クリスチャン・ウーマン」という名のもと，女性たちのあるべき姿を詳細に説明している。たとえば，装いに関して言えば，「クリスチャン・ウーマンの服装は，精神的な上品さ，そして（宗教教育のなかで培われた）教養が表れるものでなければならない」(Spring 10) と述べており，決して『聖書』では言及されていないと思われる，このような部分にまで手を伸ばし，『宗教心』を女性の生活に浸透させようとする試みが窺える。

この著の内容は『聖書』を女性に適した読書物としてとらえて，女性のために『聖書』をいかに読むべきかを明らかにしている。つまり，「エチケットブック」のねらいとしては，聖書の理解力を高めることにあったと言える。

キリスト教精神をふんだんに盛り込んだ女性のための「エチケットブック」は，その教えにのっとり女性の存在，そして彼女たちの領域とされていた家庭を神聖化するようになる。これにより19世紀以前の社会では，決して日の目を浴びることのなかった女性の仕事としての「家事」が国家規模で賞賛され，良き社会を形成するために不可欠な「職務」としてとらえられるようになった(Cott, BW 199-200)。そして，その家事をこなし，家族に信仰的に影響を与える女性は，社会的に「理想の女性」として見なされ，そこにおける存在を確固たるものにできた。いつしか社会のなかでは女性の信仰に満ちた人間像こそ幸せな社会を築き，社会をよきものにするという神話が成り立ち始めていた。この神話を浸透させたのが，まぎれもなく「エチケットブック」なのである。

男性に当然のように与えられた「正義や平等を要求する権利」(Douglas 75)の代わりに女性たちに与えられた「家庭におけるカリスマ的権威」(75)，そして「専門職としての家事」は，19 世紀において家庭，さらには文化の中心として崇められていたパーラーに置かれた「エチケットブック」により表現されたのである。「エチケットブック」は 19 世紀を通し，『聖書』と並んでパーラーのテーブルに当たり前のように置かれるようになった(黛 239)。

ジェイムス・D・ハートは『ポピュラー・ブック—アメリカの文学趣向の歴史』(1950) のなかで，19 世紀前半は「エチケットブックの時代」(88)であると述べている。つまり，資産の多さによりランク付けされた人々のなかで，彼らの格式を象徴する「エチケットブック」は重宝され，流行り多く売れたのである。

聖職者たちのみならず，世俗界の人々も「エチケットブック」の執筆にあたった。彼らは「エチケットブックの時代」の波に乗り，こぞって「エ

チケットブック」の執筆にあたった。そのなかには，長年に渡り人気女性雑誌『ゴディーズ・レディーズ・ブック』の編集に携わったサラ・ヘイルはそのひとりである。19 世紀に入り，多くの作家が「エチケットブック」の執筆にあたった結果，19 世紀前半までに出版された「エチケットブック」の数は，改訂版，増版を除いても，1830 年代には 28 種，40 年代には 36 種，50 年代には 38 種以上と上昇の一途をたどった (Schlesinger 18)。

彼らの執筆した「エチケットブック」も聖職者たちのそれと主旨は何ら変わりなく，内容は首尾一貫して家庭における「女性のあるべき姿」を定義付けするものであった。ヘイルの「エチケットブック」,『マナー，年中幸せな家庭と健全な社会のために』(1868) では，鋭い観点から女性の存在意義と役割を明らかにしている。

彼女の「エチケットブック」の特徴は,「神の愛」を与えられた女性を社会の「モラル」を形成する中心として賞賛していること，そして女性は生まれながらに男性に劣り，精神的にも男性より弱く男性に依存せずには生きてゆけないものであるとしている点である。

彼女は「不変的な書物」(M 204) としての『聖書』の内容にそって，時にはその中の一節を引用しながら,「天の神」の教えのもと男性は「労働者，生産者，保護者，規則を作る者」であり，女性は「保存者，教師，そしてお手本となる者」というように，それぞれの役割を不変的なものとし，この役割が実行されてこそ「幸せで健全な社会」が築けるとしている (21)。

ヘイルはその「幸せで健全な社会」を築くためのもっとも有効な手段として，結婚を挙げている。「男性と女性は結婚するために創られ」(M 72),「結婚生活は人類の完全な状態にすることを意図している」(72) と主張しながら，結婚生活においては，人類の起源から，男女の平等は存在せず，女性は男性の肉と骨から創られたという聖書の教えから，女性は決して男性よりも大きな存在にはなれないことしている。言い換えれば,「大きな男性」と彼に属する「小さな女性」が平等ではなく「一体化」(73) してこそ，社会の体裁をうまく正すことができると主張している。

このように，すべての物事の建設者としての男性と，その物事の内側で

道徳的に浄化する者としての女性というような，それぞれの性における義務を明確に提示しながら，「結婚とは女性の終着地であり，女性の栄光と幸福の場は家庭である」(M 72) という主張のもと，「いかに家を美しく装飾するか」(79) や，「家庭内読書と本の一覧表」(345-50)，そして「『聖書』をいかに読むべきか」(202) というように，事細かく女性の行動を家庭という「適切な領域」の概念に沿って指示している。ヘイルの「エチケットブック」は，信仰心に満ち，『聖書』の教えに忠実にそって「女性のあるべき姿」を明確化した。そこに表わされる女性像は，清楚でどこか自信がないような印象をうけるような女性像であった。

このように女性のあるべき姿を，宗教観を軸に教育した「エチケットブック」は多くの女性たちに着実に浸透していったようである。それらに描かれた理想の女性像は，19 世紀に書かれた多くの小説に描写されているのがその裏付けとなるであろう。

『広い，広い世界』は，それを証明する良い例のひとつである。現代のウォーナー研究においては，作品が出版当初より，「非信仰の原因」(Kim 31) として，女性たちが読むことを禁止されていた小説として存在することを，作家自身の意向から拒否されたことと (Tompkins, SD 149)，シャロン・Y・キムが述べるように，作品自体の内容が，信仰を軸とする「想像上の歴史書」(31) としての役割を果たしていることから，作品を小説というよりもむしろ指導書としてとらえる傾向がある。このような面から，エレンの人生経験を通し，読者に女性のあるべき姿を教育している『広い，広い世界』と「エチケットブック」との関連性を見出すことができる。

作品においては，信仰心を軸に，女性がいかに権力に服従すべきか，そして女性にとって家事とはいかなるものかということや，いかに家事をこなすべきかが詳細に言及されている。「エチケットブック」同様，信仰心は，常にストーリーの中心に位置づけされている。

作品の冒頭から，エレンは間もなく離れ離れになる病弱な母親により，人生における神の存在の大きさを教え込まれる。

つい前までモンゴメリー夫人は一生懸命正気をとりもどそうとしたが，無理であった。しかし，エレンの深いすすり泣きが彼女を正気させた。彼女は二人のためにこの激しい興奮をとめる必要があった。すぐに沈着が甦った。「これではだめよ。…落ち着くことができなければあなたも私も傷つくのよ。…このような悲しみをだれが授けて下さるか覚えておきなさい。悲しんでも良いけれど，決して反抗してはいけないのよ。決して目には見えないけれど，神は私たちのためにこのような試練をお与えになるのよ。」と彼女は言った。

(WWW 12)

神がすべての試練を与えてくださるとし，「悲しんでも良いが決して反抗してはいけない」という母親のこの言葉は，作品全体を通し，エレンが生きて行く上での教えとなっている。つまり，作品はエレンがこの教えを理解するまでの道のりを綴ったものであるとも言える。作品において，神の存在は絶対である。冒頭で自己否定や神への従事を徹底的に教育されているエレンは，その後においてもその教えを忘れることはない。そして，身体的に成長しようとも，社会的に大きな存在の男性に対し，「リトル・エレン」として，神の教えのもと，権力への服従を肯定し続けているのである。

また，家事の指導書としては，アリスの亡き後，彼女の代わりとしてハンフリー家の養女となったエレンは，義姉に代わり，かつて彼女がこなしていた「山ほどの細々した家事」(WWW 456) をこなそうと試みる。彼女のこれまでの仕事は，ハンフリー家のメイドのマージェリーによって詳細に説明されている。マージェリーの説明は，家庭における女性の仕事としての家事の説明のみならず，「男性を喜ばすため」としての家事の重要性を明示している。

アリスが行っていた家事の詳細な説明は，家庭における家事を女性の専門職として成立させているだけでなく，一日のほとんどを家事で費やす女性の生活の流れは，それを中心に回っていることを示唆している。このように，「第二の聖書」として女性の性格や居場所を神聖化した「エチケット

ブック」は驚異的な力でアメリカ社会に浸透し，女性を天使として人々に描かせるのに大きく貢献し，崇拝された。

しかし，ここで問題なのは，この理想像はナンシー F. コットが「女性は男性の快楽と彼らへの奉仕のために創られた」(P 224) と主張しているように，「エチケットブック」は男性中心的価値観を押し付けるようなものであるに過ぎなかったということである。「理想の女性像」には女性の意思はまったく反映されず，男性の思いのままに女性の生涯を全面的に企画し，男性好みの女性像を作り上げていたのである。

「エチケットブック」が広く女性たちに読まれたことは，女性のあるべき姿の基本事項を彼女たちに叩き込むのに大きく貢献しただけでなく，小説の範疇で定義される「初期の指導書」としての『広い，広い世界』を彼女たちにとって読むにふさわしい書物としてとらえるための根本的な価値観を作るのにも有効に作用したと考えられる。

III

「エチケットブック」と『広い，広い世界』の女性のあるべき姿を示した指導書性としての共通点を明らかにすることにより，この作品のベストセラーの外的要因 1 要因を探り得ることができた。しかし，この共通性を明らかにしただけでは，ベストセラーの要因の髄を知り得たとは言い切れない。

それは，『広い，広い世界』には「エチケットブック」にはないもうひとつの要素を持ち備えているからである。「エチケットブック」には欠けていて，『広い，広い世界』にはあるもの，それは娯楽性である。読者は作品を読む過程で，ヒロインと自らの人生とを重ねながら，ときには胸を弾ませ，またときには涙しながら，家事の合間に楽しんで読書をしたのである。

女性のあるべき姿を端的に明らかにすることで，「理想の女性像」構築浸透に貢献した「エチケットブック」であったが，決して読まれなかったわけではなきにしろ，進んで読まれるというよりも，むしろ『聖書』を理解

するための二次的なものとしてパーラーのテーブルに置かれ，行動を指示してくれるハウツー本として，その存在価値を発揮する書物としての役割のほうが大きかったと見える。19 世紀初頭というのは，一般大衆のなかに娯楽としての読書が定着した時代であるが，日常用の指導書として存在していたとされる「エチケットブック」は，娯楽性には欠けていたのである。

「エチケットブック」よりも娯楽として「読む」という行為を促進させ，『広い，広い世界』よりも前に，娯楽としての読書を定着させ，その結果「理想の女性像」を大衆に浸透させるのに大きく貢献したものがある。それは雑誌である。雑誌は社会の変遷を敏感に察し，その流れとともに発展し，巨大市場を築いた。

フランク・ルーサー・モットは『アメリカの雑誌の歴史』(1930) において，19 世紀前半は「雑誌の黄金期」(339-43) であったと述べているが，実に独立した国家として歩み始めた少なくとも 19 世紀前半までのアメリカにおいては，雑誌の全盛と呼ぶには十分過ぎるほどの条件が揃っていたと言える。

その条件として挙げられるのが，19 世紀以降の社会の変遷が大きな要因としてある。第 1 章ですでに述べたように，ジャクソニアン政権以降，人々のなかに「国家の繁栄」という目標ができたことにより，国家に「1) 流通システムの発展 2) 印刷技術の発展 3) 移民の増加 4) 教育の浸透による識字率の向上」(野口 16) という現象を引き起こした。

流通システムの発展は，「交通革命」によりもたらされた。拡張主義の時代が象徴するように，アメリカ領土は巨大化していったのであるが，その際に築かれた川や道の完成により運搬船や車が発達し，結果流通システムが確立していった。このシステムの発展は，短期間に情報やものを許される限りの範囲で広げることを可能にした (野口 14-16)。

そして印刷機の発展は，シリンダー印刷機の導入により，印刷工程を短縮させ，結果，大量生産を可能にした。そしてこれにより印刷物の低価格化が実現され，気軽に印刷物を購入することができるようになった (野口 15-16)。

また移民の増加は，印刷物の読者となる，人口の増加を促し，労働力を向上させた。さらに 1820 年後半よりなされた教育改革は，国民識字率の向上を促した。特に女性においては 19 世紀初頭には全体の半数にも満たなかった識字率が，1840 年代には 90 パーセントにまで向上した。国民全体を通してみても，90 パーセントの人々が字を読み書くことができるようになった。これらのような社会の変遷のなかで出版界は巨大化してゆき，これまで地方に分散していた出版社は，当時，多彩な情報源泉としての都市であった，ニューヨーク，ボストンそしてフィラデルフィアの三都市へ集中しはじめたのである (Douglas 83)。

出版界がビジネスとして成立したことにより，アメリカにおける文学の概念は大きな過渡期に立つことになる。もっとも大きな要因は読者層の変化から来るものであると考えられる。

これまで読書は，少数派の知識人に許されたものであったが，ビジネスとして確固たる利潤を得るためには，少数派の彼らは読者層としては不向きとされたことは言うまでもない。先ほど述べた機械の発展，教育の普及による識字率の向上，そして人口増加などの社会の変遷は，大衆を読者の中核にするという結果を生み，出版市場の標的を大衆にした（野口 17-18)。

そして，その読者層の変化は出版物そのものの質を変えることになる。出版物はもはや「質」よりも大量に「売れる作品」，つまり「確実に利潤を伴う作品」というものに重きを置くようになったのである。その的として選ばれたのは，当時のアメリカ文化の中心として男女問わず不特定多数の大衆に崇められていた家庭であった（野口 17-18)。家庭をテーマにした作品は，国家的に推奨されたが，家庭は女性の聖地として考えられていたことを考えると，その内容は女性を読者の中心と見なし，女性読者を意識したものであるととらえることは妥当な考えである。

当時の人気ジャーナリストであり，同じく人気ジャーナリストとして活躍したファニー・ファーンの実兄でもある N・P・ウィリスが，「読者は女性である (そして) 政治と商業を除き，いかなる義論にも裁きを与えるのも女性である (さらに) 売れる文学のカギを握るのも女性である」(Douglas

103) と公言していることは，読者の中心は女性以外何ものでもないことを物語っていると言える。

多くの出版社は，出版界における過激な競争に打ち勝つために競い合いながら，こぞって家庭をテーマにした出版物の製作にあたった。この競争のなか生まれたのは職業としての作家という存在である (Douglas 83-84)。彼らの多くは出版社の意向により家庭をテーマとする作品を書くことに従事した。彼らの書いた作品は，政党機関紙などの新聞の平均価格は 6 セントであった当時において（黛 230），その価格を大幅に下回るペニー・ニュースペーパー，雑誌，日曜学校の小冊子などの低価格な本などのなかに掲載された (Hart 86)。

1850 年代初頭の「中産階級の新しい器官のひとつ」である『ハーパーズ・マガジン』が「文学は大衆を追い，ハイウェイ，そして垣根を貫き，その道をコテージ，工場，路面バス，車に押し込み，世紀におけるもっとも国際的なもののひとつになった」(Hart 86) と言及していることからも窺えるように，実に多くの作家が大衆向けの出版物執筆に携わることにより，アメリカにおける文学のカラーは大衆化してゆき，大衆好みの内容に変化していった。

特に雑誌においては，本が 1830 年から 42 年までの間に年間平均 100 冊ほどの出版状況であったのに比べ，雑誌は 1825 年から 50 年の間に 4，5 千種類の新誌が出版されたという事実（野口 15）を考えてみると，いかに雑誌が大衆の心を掴んで，広く普及されていたかを知ることができる。このように 19 世紀には，雑誌を主体とする出版界の媒体ができあがった。

19 世紀に多く読まれた雑誌は，これまで宗教家たちが自派の教義を説き，信者の結束を固める意図を剥き出しにしているもの (Douglas 230)，また家庭をテーマにしたものであっても，英国の雑誌の傾向を模倣し，大衆には縁遠い英国などの海外の情報を掲載したものなどが主流であったものとは別に，読者としての大衆が自らの生活のなかで家庭の重要性を見出すことができるいわば「大衆うけ」するものであった。

ルース・E・フィンリーは，『ゴディーズの貴婦人』(1931) のなかで，大

衆うけのもっとも重要な要素とされたのは，雑誌が「アメリカ的」であるということであったと述べている(43)。このアメリカ的という価値観こそ，共和国国民としての自らの存在を意識し始めた大衆にとっては魅力的な内容であり，それを多く掲載した雑誌を好んで読んだ原因のひとつに違いない。

このナショナリズムを明確に示し，また家庭というテーマを武器とした雑誌出版界は，当時の男性同様，職業作家となった女性たちによって支えられた。彼女たちの多くは，たとえばヘイルのように，5 人の子どもと自分を残し先立った一家の大黒柱である夫に代わり，生活を支えるために作家になったというような，未亡人であり，家庭のことに関しては「専門知識」を蓄えた女性たちであったことは言うまでもない。そのような女性たちにとって，この類のテーマはお手の物であった。また，生計を立てるための仕事を得るのが困難であった彼女たちにとっては，適した職業であったようである(Geary 366)。

このような流れのなかで，「女性編集者による女性のための雑誌」が誕生した。『ゴディーズ・レディーズ・ブック』は，19 世紀に多く出版された上記のような雑誌のなかで，1830 年の出版以来 68 年にもおよび，多くの購読者の心を掴み支持を得た雑誌のひとつである。

『ゴディーズ・レディーズ・ブック』が読者にとって魅力的であった最大の理由も，その内容が非常にアメリカ的であったということである。もともとこの雑誌は 1830 年に 19 世紀の「出版界の貴公子」(Finely 41) と呼ばれた，ルイス・ゴディーが出版したときには，このアメリカ的という表現には見合わない雑誌であった。後にその雑誌の編集長として招かれるヘイルもこの雑誌について「明らかに英国雑誌に掲載されている小説や記事の混ぜ合わせ」(Burt 71) と評していることからも窺えるように，雑誌に掲載されるものはほとんどが英国の出版物の再版や，アメリカの新聞の記事を引用したものであり，そこに「新生国家としてのアメリカ」の独創性はなかった(Finley 43)。

作家でもなくまた編集者でもなく，あくまで利潤を重視する出版者とし

てのゴディーは，そのことは十分承知の上であったが，アメリカ人作家や編集者を雇うよりも再版物を手に入れるほうがコストもかからないということで，止むを得ずこのような雑誌を出版していたのである(43)。だが，時代の流れのなかで読者の求めているものがアメリカ的な出版物であることを感じ取った彼は，『ゴディーズ・レディーズ・ブック』よりも 2年も前に『レディーズ・マガジン』という雑誌で，「アメリカ人によるアメリカ人のための雑誌」という概念をつくりあげていたヘイルを起用する決心をするのである。

ヘイルは彼女の雑誌と合併することで，ゴディーの誘いを受けることになる。そして，1837 年『ゴデイーズ・レディーズ・ブック』は「アメリカ化宣言」をし，19 世紀を通し，アメリカ最大の発行部数を誇る雑誌に成長したのである(Finely 43-45)。以降，この雑誌は「国家の雑誌」という宣伝文句を武器にアメリカ人読者の心を掴み，読者はその中から「アメリカ人気質の新鮮さ，活力そして特有のかたち」を見出すことができたのである(46)。

読者の中心は言うまでもなく女性であった。編集長であるヘイルは，編集の際「女性の進歩」(Finely 40) というテーマを掲げ，アメリカ的な女性のあるべき姿を明らかにしていった。雑誌は，中産階級の，普通の女性の生き方や，感覚を中心に話を広げられており，決して上流階級の，パーラーに集まり最新のファッションで着飾る女性ではない。ヘイルの主張する「女性のあるべき姿」は，国外の価値観にとらわれず，あくまで「アメリカという新しい国に誇りを持ち，信仰厚く，家庭の幸福を何よりも大切にし，その中で自分の向上を願う女性たち」(佐藤 38) の姿，つまり当時の社会が求めていた女性の姿であった。

しかし，この「女性によって女性のために書かれた雑誌」として自負する『ゴディーズ・レディーズ・ブック』は，表向きの読者層は女性として考えられているが，決してそうではない。ヘイルは雑誌を編集する際，常に女性読者の裏に隠れた男性たちを意識していたのである(Finely 39)。当時，女性には自由に使うお金が与えられなく，買い物をする時には男性の

承諾を必要とした。いくら女性が欲しいと願っていても男性が反対すれば手に入らなかったのである。

ただならぬビジネスの才能を持った女性であるヘイルはこれに即座に対応し，男性に喜ばれるような内容を掲載することに専念している。したがって，雑誌内に描かれている女性像はどれも男性好みの女性であると言える。そして，そこから当時の男性中心的価値観を基調とする美しい女性像を見出すことができる。

たとえば，当時の多くの雑誌において，目玉のひとつとされたファッション挿絵ひとつを見ても，いかなる女性が好まれていたかを窺うことができる (Fig.1)。挿絵の女性たちはどれも美しいロングドレスを身にまとい，ほっそりとした体系に引き締まった腰を持ち，髪をきれいに束ね，目は大きく，指は細く，そして肌の色は白い。つまり，これらに相当しない女性たちは女性らしさにかけるとういうことを訴えていると言える。

さらに，挿絵のみならず『ゴディーズ・レディーズ・ブック』に掲載された短編小説，そしてアドバイスにおいても理想の女性像を見出すことができる。1850 年 1 月号に掲載されている，ジョセフ・C・ニール著の「理想の夫と女学生の好み」では，社交界デビューをし，将来の結婚相手を探すことになった若い女性たちが，結婚に至るまでの話である。主要な登場人物は，エラ・カークランドとクララ・ハワードで，両者は対照的な性格の持ち主として描かれている。

社交界デビューをした二人はともにはしゃぎ，男性を選ぶ際の基準は，彼らの「外見」と「経済力」である。しかし，クララの方は時が流れるに連れ，その考えの甘さに気づき，次第に改心し，男性を外見よりも彼の持つ「崇高さ」，「温厚さ」を基準に，男性への敬意を表わすようになる。

一方のエラは，何よりもまず階級や外見だけで男性を判断するあまり，自分の好みに合わない，好意を持たれた男性を「不快」に思い避ける。しかし，次第に彼の良さを発見するが「後の祭り」である。彼は彼女から突然去ってしまう。結果としてクララは彼女が理想とする男性と幸せな結婚をし，前途洋々な未来が約束されることになる。

小説は，クララとエラという対照的な人物を通し，教訓的に男性を選ぶ際の注意点を読者に伝えている。この小説の最も教訓的な部分は，クララがエラに宛てた自らの近況を伝える手紙のなかで，「あなたは主人のアーサーが裕福か知りたいでしょうね 私は何の迷いもなしに『イエス』と言えるわ…彼が私に与えてくれる崇高で心温かく，知的さからくる豊かさは，経済的な豊かさよりもよっぽど意味があるわ…彼は私に，幸せは周囲の環境よりも私たち自身にかかっていることを教えてくれたの…神は妻としてのあなたを祝福なさるでしょう」(IH 31) という場面である。

この小説が読者に伝えていることは，1)「理想の夫」とは経済的な豊かさよりも精神的な崇高さを持つ人物であるということ，2) 結婚は女性の最大の幸せであるということである。二番目の根拠としては，小説の最後の部分で，結婚したクララが「私たち夫婦の未来は有望だわ」(IH 31) と述べているように，「幸せな女性」として描かれていることである。この小説は妻としての女性を擁護していた当時の社会性を反映しているものであると言える。

また，小説に限らずアドバイスにおいても「女性のあるべき姿」を明らかにしている。作家としてだけでなく「教育者」として，アメリカにおける子女教育に多大な影響を及ぼした女性のひとりである，エマ・ウィラードによって書かれた同雑誌，1852 年 9 月号に掲載されている「何を教えるか」では，「母親」としての女性は，子どもに 1)「倫理的な良心」，2)「健康と強い体，精神を維持する方法」を教えなければならないと助言している (295)。

ウィラードは「倫理的な良心」としてあげられるのは，「神と人類への敬意」であると述べている。さらに敬意を払う順序としては，神が第一で人類は二の次であるとしている。

また，「健康と強い体，精神を維持する方法」としては，彼らの食生活や日々の運動のなかでこれらを教えこまなければならないとしている (WT 295)。この助言から窺えることは「母親」としての女性像だけではなく「家庭における教師」としての女性像をも女性たちに明らかにしていること

である。そして，これらのことを教える「教師としての女性」は信仰的で家庭的でなければ勤まらないということを，直接本文では述べられていないが明確に暗示している。このアドバイスだけを見ても明らかであるが，アドバイスの中心は家庭における女性の行動やあるべき姿である。

雑誌に書かれた短編小説やアドバイスは，「女性のあるべき姿」を小説においては教訓的に，そしてアドバイスにおいては明確に表わした。これらどの作品も読者としての女性が家事や育児の合間に読める長さのものであったために，余暇を過ごすための娯楽として，読者は短い時間に「理想の女性像」を自らの心に描くことができた。そして女性の領域において，理想的に生きる女性には結婚という幸せを与え，そうでない女性には不幸な結末を与えるという決まりきったストーリー性を教訓的な話としてとらえ，それを訓戒として役立たせることを可能にした。

このように，最新流行ファッションを追っているファッション挿絵や，家事の合間に娯楽として，女性だけの世界を描いた教訓的な短編小説，そして「エチケットブック」の一部を切り抜いたようなアドバイスなどの様々な色彩が混合された雑誌は，現在のようにテレビや映画，そしてラジオがない当時においては，暇な時間を埋める娯楽として重宝されたのである。したがって雑誌が，「エチケットブック」よりもさらに 19 世紀を通し多く読まれ，女性たちに多大な影響を及ぼしたことは自然の成り行きではないかと考えられる。

『ゴディーズ・レディーズ・ブック』においては，1860 年までに購読者数が 15 万人に達し(Damon-Moore 22)，アメリカにおける主要な雑誌のひとつとなったのであるが，この統計から，『広い，広い世界』が出版された 1850 年にはすでに，女性をヒロインとし，女性読者を意識した内容の小説が確実に売れるという外的な働きかけが定着していたと考えられる。

IV

『広い，広い世界』の驚異的売上げには，作品の「エチケットブック」と雑誌の関連性が物語るように，大衆文化が一気に花開いた 19 世紀という社会性がその一要因としてあることは否定できない。確かに，ある出版社からは「ばかばかしい」と罵られ，売れることなど予期されず，出版当初はろくな宣伝も成されなかったこの作品は，発売当初の売上げは最悪なものであったようである (Geary 378)。しかし，その後の出版社による懸命な宣伝が功をそうし，売上げ部数が驚くほど伸びたという事実の裏には，大衆文化のなかで生まれた活字文化が人々に対し，多大な影響力をもっていた 19 世紀の時代性が，色濃く反映されていると考えられる (379-80)。

だが，ベストセラーの要因は果たしてそれだけであろうか。『広い，広い世界』の読者たちは，ただ単に「真の女性」が擁護されていた当時の社会性に影響され，また作品が売れるためだけに書かれた宣伝に影響され，もしくは宗教家たちの強い薦めだけに感化され，作品を読んだのであろうか。それだけを『広い，広い世界』のベストセラーの要因として片付けてしまうことは，それを単なる「大衆文化の産物」としてとらえることに過ぎず，19 世紀という時代が作り上げた文学としての価値は，永久に埋もれてしまうのではなかろうか。

現代において『広い，広い世界』は，ベイムやトンプキンズが主張するように，19 世紀の文学の中心をなした作品として，研究がなされているのであるが，これは作品が内容的にも文学として認められている裏付けである。つまり，『広い，広い世界』のベストセラーの要因は，過去 30 年余りのウォーナー研究において積極的に成されている，その内容からも窺えると言えるのである。

作品の内容から，ベストセラーの要因を考察してみると，そこには，「真の女性」になるべく教育を受けてきた女性読者たちの心を魅了する，いくつかの要素があることに気づかされる。そのなかの 1 要因としては，作品が，当時の女性の「人生の指導書」であった『聖書』の教えを，女性読者

のためにわかり易く書き下ろした「やさしい聖書」として存在していたことである。

シャロン・Y・キムが，『広い，広い世界』は，その内容の類似性から，19 世紀版『天路歴程』であると述べていること(28)や，作品が出版されてまもなく，それが教会図書館に置かれたこと(33)からも窺えるように，作品と宗教観は，密接な関係にある。『広い，広い世界』と，『天路歴程』の両者は，『聖書』を理解するための本としての意図性は，ほぼ類似している。しかし，クリスチャンの物語と，エレンの巡礼物語の決定的な相違点は，エレンの物語が，女性読者のために書かれたということである。

『天路歴程』の目標は「真のキリスト教徒」となることである。一方の『広い，広い世界』においては，エレンの巡礼を通し，女性がいかに「真のキリスト教徒」となり，「家庭の天使」となることが目標となっている。当時の多くの読者たちは，表には出せないが，決して完璧ではないエレンと自分とを重ね合わせ，まるで自分が巡礼をしているような気持ちで，ひとつひとつキリスト教徒として，そしてまた「家庭の天使」としていかに生きていくべきかを見出したのであろう。

『広い，広い世界』が出版された 19 世紀中葉においては，女子初等教育が盛んに行われていたにもかかわらず，女性たちにとっては未だ，『聖書』を深く理解することは困難であったようである。というよりもむしろ，信仰心は女性たちには不可欠な要素であったにもかかわらず，多くの女性たちは，『聖書』をいかに自らの生活に取り入れるべきかと試行錯誤していたようである。

以下の，ウォーナーに宛てられた，ある読者からの手紙の文面を見ても，女性にとって『聖書』を理解することがいかに困難を極めたかを窺うことができる。

> 『広い，広い世界』をあてがわれることで，私がどんなにそれに感激したかあなたは想像できますでしょうか。私は主への興味が生じたころ，すでに『聖書』を持っておりましたが，その価値に気付くことができ

ず，また（主が望むように）読むことができませんでした。…私は彼のお力と優しさが幸せな者の人生を満たすとされる主の存在を知りたかったですし，愛したかったのです。私はそれを一生懸命『聖書』のなかで探しましたし，彼を愛し，過ちと闘おうと決め，そして彼の教えにそって生きようと努力しました。しかし，私を取り巻く環境と日常生活のなかで，私はたびたび気まぐれさと空想家としての自分を責められるとき，不幸な気持ちになり耐えられない気持ちになっていました。ですから，あなたこそ私の質問に答えてくださる思い，今こそその時であると思い，思い切って手紙を書きました。(Kim 32)

手紙の筆者をはじめとして，『聖書』をいかに理解すべきかに頭を悩ませていた多くの読者たちは，まるで長い巡礼の過程で，真のクリスチャンになった，『天路歴程』のヒーロー，クリスチャンのように，『聖書』の教えを試行錯誤しながらも実践し，やがて真のクリスチャン，そして「家庭の天使」となったエレンの姿と自身の姿を重ねながら，女性にとっての『聖書』の正しい読み方を見出すことができたのである。

作品において，『聖書』を骨の髄まで理解するために効果的に成されていると思われる手法のひとつは，「祈りとごほうび」のいくどにも及ぶ繰り返しである。当時の女性にとっての幸せの終着地である，真のキリスト教徒となり結婚というゴールに向かって，長い巡礼の旅に出るエレンが，激しい葛藤を祈りと涙を流し乗り越えた後には，必ず「ごほうび」が与えられるのである。長い旅ではあるが，「祈りとごほうび」は必ずひとつのまとまりとして，繰り返し作品に登場し，「ワンパターン化」しているのである。

たとえば，作品の冒頭部分において，母親との別れを切り出されたエレンは，父への反抗からくる悲しみを抑えることができない。しかし，母親の説得により，キリスト教徒という名のもとに，祈り，反抗することはいけないことという教訓を得たその少女は，ここではじめて「ごほうび」を与えられるのである。彼女に与えられているものは，ひとりで出た買い物の際，あわや騙されそうになる彼女を助けてくれる，良心的な紳士との出

会いである。

父親の事業の失敗により，離ればなれになる娘に，新しい服を新調することもできないほど経済的困難を強いられているモンゴメリー一家であるが，見知らぬこの紳士は，エレンに上等な帽子や，食用の鳥をプレゼントしてくれる。

さらに，父親の気まぐれによってもたされる両親との別れを目の当りにし，孤独に見舞われ，激しい悲しみに襲われる場面においても，このパターンは明示されている。ひとり孤独に耐えながら，ハドソン河を上る蒸気船上で，「すべての試練は神様のおぼし召し」であるという母親の教えを理解しようという「試み」が幾度にも繰り返される。しかし，この時点において，母親との別れ間際のほんの短時間しか聖書を勉強していないエレンであるが，彼女の「試み」は報われ，「ごほうび」が与えられている。

ここでのそれは，信仰的な紳士，ジョージ・マーシュマンとの出会いである。彼は，孤独なエレンの「友達」となり，彼女の孤独を癒してくれる。さらに，信仰的な彼は，抑えられない自我と，信仰との間で葛藤するエレンに，信仰心を促す説教を施し，神の存在を再確認させる。神の存在にあらためて気付いたエレンは，孤独な世界からの脱出を成し遂げ，安堵感を得る。

サールウォールでの生活のなかでも，このサイクルは引き続き健在である。たとえば，厳しい叔母，フォーチュンとうまく打ち解けることができないエレンは，しばしば彼女の仕打ちに絶えられず，反抗心を抱きそうになってしまう。数少ない母親との手紙のやり取りのなかで，幾度にも「全力を尽くす」との意気込みを露わにするエレンであるが，容易に叔母への反抗心を打ち消すことができない。反抗心が生じる度に，涙で浄化する試みが何度も繰り返される。そして，その都度，「棚から牡丹餅」のように，幾度にもおよび「ごほうび」が与えられるのである。

そのなかでも，もっとも意義深い「ごほうび」は，アリスとの出会いであろう。母親からの手紙をフォーチュンが勝手に開封してしまったとき，容易に怒りを静めることができず，無言で心向くままに，「山」へと逃げる

エレンであるが，叔母への直接的な反抗を避けた彼女に与えられたものは，アリスとの出会いである。作品中盤までに，エレンに信仰心を教育する役割を担うアリスとの出会いは，エレンの人生を変えるほど重要なものとなる。

このように，幾度にも及ぶ「祈りとごほうび」のサイクルのなかで，読者は自然と，作品がエレンの幸せ，その幸せとは，当時の女性にとっては，結婚で幕を閉じることを予期できる展開になっていると言える。つまり，必ずエレンの幸せで終わるという予測は，読者が安心して読書に専念できる要因となっている。さらに，現実社会において，誰もがしうるエレンが体験するような「不快」と思われる体験は，決して悲観的なものではなく，幸せになるための段階としてあり，それをいく度も体験し，打ち消し，祈ることにより，それは彼女たちにとって良きものに変わることを暗示しており，それは読者たちの勇気付けの契機となっている。また，この単調なサイクルの繰り返しは，無意識のうちに読者に，辛いことがあっても信仰心を忘れず，自尊心を否定し，それを涙で浄化し耐えれば，必ず幸せが訪れるという信奉を根付かせていると言える。

さらに，ここで重要なのは，長い巡礼において，エレンに与えられる「ごほうび」のすべてが，彼女よりも「大きな」存在，そのほとんどが男性との巡り合いということである。「大きな」存在は，女性はひとりでは生きていけないことを暗示していると考えられる。人生において，壁にぶつかったとき，助けてくれるのは，必ずエレンよりも社会的に「大きな」存在なのである。これは「小さな」存在としての女性像，または女性の幼稚性を良しとしている裏付けの何ものでもないことを物語っていると言える。

言うまでもなく，この「大きな」存在たちは，ほとんどが信仰深い人物であることにも気付かされる。これは，女性と宗教との関わり合いを強調していると言える。人間が精神的に弱っているときに，決まって現れる彼らの存在は，エレンにとっては救世主のような存在として映っている。したがって，エレンにとって彼らの言動ひとつひとつは，信頼性があり，絶対となるのである。

「ワンパターン」なサイクルのなかで繰り広げられるエレンの巡礼の旅

は，読者に「真の女性」なるためには，いかに行動すべきかを分かり易く教え諭していると言えるとともに，「普通の女の子」が，ここまで苦難を強いられ神の子となるという設定から，そのような女性になることが，いかに大変なことなのかをも同時に提示し，現実世界において，結婚に行き着いた女性を崇拝させる要素を作っている。

その他の要因としては，まず，読者たちがウォーナーの手がけた現実世界のありふれた背景の設定と，そして，決して完全人間とは言えないエレンの人物像にある。人生を通し，経済的困難な生活とそうでない生活，そして都会での生活と孤島での生活の両方を体験したウォーナーは，その両極端な生活状態を小説に生き生きと表現している。

都会の描写においては，エレンと死を宣告されている母親が，永遠の別れ間際に行う買い物において，商業化された都市の状況が事細かに描かれている。作品の冒頭部分において，エレンが滞在先のホテルの窓から見る点灯夫がガス灯をともす風景，そして大通りを「絶え間なく」(WWW 10) 横切る荷馬車や大衆の状況は，地方に住む読者にとっては新鮮な印象を与える。

そして，エレンがひとりで母親のお使いへ出るとき，幼い少女を騙そうとする店員は，商業化された都市における人々の象徴としてとらえることができる。イザベラ・ホワイトは，このような都市部の描写においてウォーナーは「やや否定的な感触」(33) を抱いていたと述べている。ウォーナーが描写している都市像は，華々しい都会への憧れを読者に植え付けるとともに，とくに幼い子を平気で騙そうとする店員の姿から，都会とは平気で人を騙す人が多いというような都市部の恐ろしさのイメージを読者に植え付けていることを顕著に裏付けていると言える。

さらに，エレンが父親の知人に連れられ，サールウォールへ行く道中は一種の旅行記としてとらえることができる (Papashvily 6)。実存しないサールウォールまでの道のりではあるが，誰もが知っているニューヨーク州からニューイングランドを縦断するハドソン河を蒸気船で上り，その後，馬車などを乗り継いで行く現実と想像の合間の存在するその村は，あたかも

実際に存在する地名のような印象を読者に与え，実際に読者自身が旅しているような気分にさせている。

長旅を経て到着する地方の描写においては，都市部のそれよりもさらに詳しく地方独特の自然及びカントリーライフの描写が成されている。地方での生活の描写は，都会育ちの「普通の女の子」エレンが，彼女にとって未知の世界である地方での生活に馴染もうと四苦八苦する状況が，時には深刻に，そして時には面白おかしく描いている。

その一例としては，たとえば，都市部に住む読者にとって，屋根裏にある豚肉の燻製などは，非常に目新しいものであるし，また異様な光景に映るであろう。エレン自身，物語の中盤より地方の生活のなかで光を見出すことができてきているのであるが，その光景を目の当りにするや否や，そこでの生活への自信を失ってしまう。

この場面は挿絵が添えられているのであるが，「トーストのように熱った体」(WWW 234) に耐えきれず，その場に倒れこんでしまう状況が描かれている (Fig.2)。都市部に住むエレンのような読者たちにとって，エレンの気持ちは痛いほど理解できたであろうし，この挿絵はさらにそれを助長していたのではなかろうか。

また，サールウォールの恒例の行事である「ビー (bee)」では，村人がともに準備し，ともに楽しむにぎやかな状況や村人たちの活気溢れる状態が事細かに描写されている。人口面においては，地方よりもその数は勝っていても，作品冒頭部分におけるエレンの都会での生活からも窺えるように，人々の交流が人情味溢れる交流が乏しい都市部の状況に慣れている，いわば「都会っ子」にとっては，異様な光景として映っていたであろう。

さらに，『広い，広い世界』においては，アメリカにおける都市と地方の生活だけの描写にとどまらず，エレンをヨーロッパにまで連れ出し，そこまでの道のりや，ロンドン，そしてスコットランドなどの街並や生活習慣を詳細に描いている。未だ海外への旅行が裕福な人々の特権としてあり，多くの読者にとってはもしかしたら生涯体験し得ないであろうと思われる19世紀においては，作品は旅行記としての役割は十分に果たしている。

しかし，このエレンの海外生活の描写は，単に読者に海外の生活記を伝えているだけではないようである。エレンの英国での生活においては，読者を独立した国家としてのアメリカ国民であることに気づかせるための，言い換えれば，読者の「ナショナリズム」を奮起させるための試みがしばしば成されている。

作品においては，英国の街並や，そこに住む人々の人間模様を，実際に現地へ行ったことのない作家とは思えないほど的確に描写しているのであるが，アメリカ人を「野蛮人」(WWW 507) や「裏切り者の集団」(506) と呼ぶ英国人の価値観を作品のそのまま反映させている。そして，伯父や叔母から，アメリカ人であることを否定されるエレンであるが，「もし私が男なら喜んでアメリカのために戦う」(506) とまで言い切り，必死になり祖国であるアメリカを弁護し，アメリカ人である自分の存在を肯定する姿勢に出る。結果的に，彼女の主張は「おかしな考え」(506) として片付けられてしまうのであるが，その試みは，読者にあらためてアメリカ人であることに誇りを抱かせる契機を与えている。国家規模でナショナリズムが重要視されていた 19 世紀においては，アメリカ人気質をくすぐるこのような内容は，読者にとっては好意のもてる内容であったに違いない。このように，多くの読者にとって自分たちにとっては未知の世界とも言える，ある読者にとっては都会，そしてまたある読者にとっては地方の生活，そしてまた多くの読者にとっては，海外の目に浮かぶような自然や街並の描写は，読者の他の世界への想像力を増加させ，興味を注いだ。

さらに，地方独特の慣習紹介のみならず，『広い，広い世界』においては，女性読者の興味をそそるような内容を各所に取り入れている。たとえば，女性の領域としてあった，家庭内における装飾や内部構造をまるで「インテリア情報誌」のように詳細に描写している。

> 部屋の中心にはじゅうたんだけが敷かれており，あとのものは白く塗られていた。家具はありふれていたが，きれいに磨かれていた。十分すぎるほど大きな布は三つの窓を覆い，ベッドに優雅に軽くまとわれ

ていた。化粧台は真っ白な木綿布に覆われていて，クッションの傍らには花が飾られていた。　(WWW 163-64)

また，ハンフリー家の「広く，設備の整った小奇麗なキッチン」(WWW 167) は，アリスとエレン，そしてメイドのマージェリーのみが共有できる領域として描かれている。そこには，男性の姿は存在しない。そこで初めてケーキを作ることに挑戦するエレンは，そこで家事の楽しさを実感し，女性の役割として家事を受け入れるようになる。

3 人が楽しそうにケーキを作る場面は，男女の役割分担を徹底的に教え込まれていた当時の男性読者には決して共有できない場面である。つまり，女性読者にだけ与えられた作品を読む上での特権であると言える。19 世紀においてどこにでもありそうな「ありふれた」日常生活，そして誰もが共有するごく当たり前の喜びや悲しみを描いたこの作品は，確実に読者の心を掴んだ。

エレンを取り巻く環境のみならず，読者の心はヒロイン，エレンにも惹かれている。たとえば，『若草物語』(1868) において，男勝りのジョー・マーチがエレンの悲しみを共有し涙を流したように，当時多くの読者がエレンに同情し，彼女の人生を共感した。その要因としては，彼女が，同情を受けやすい孤児であり，「叔母に対し不快を覚えたり，階級意識から，祖母や叔母の婚約者を敬遠したり，家事を喜んでしなかったり，また実践よりもまず祈り」(Papashvily 4) というように，「できの悪い女の子」という設定から始まっているからである。

エレンが最初から完璧な少女であったのなら，作品はベストセラーにまで到達しなかったであろう。「決して見過ごせない不幸で可哀相なエレン」という肩書きが，おそらくエレンよりも不幸でない女性読者たちを作品の虜にしたのである。家事の合間にできた余暇の時間を縫って，時にはエレンの母親代わりとなり，幼いエレンをずっと見守り，少女と同世代の読者は，彼女が完璧でないがゆえに起こす失敗が，現実世界においては，自分の失敗のように受け止め，同情しともに涙を流した。

そして，挿絵の少女の視線がほとんどの場合において空，つまり「天の神」の方を向いていることからも明らかなように，どんな状況下においても信仰心を忘れず前向きに生きるエレンに感銘を受け，それをモデルとして見習う決心をしたであろう。

このように，そのストーリー性から見ても，娯楽として，読者が楽しんで読めるような，自伝的でもあり，旅行記的でもあり，インテリア誌的でもあるという作品の多様な特徴が女性読者を魅了してか，19 世紀において『広い，広い世界』はある種の「流行書」として存在するようになったのである。

『広い，広い世界』が出版された 5 年後の 1855 年，ヘイルの著書『女性名鑑』において，『広い，広い世界』を「小説の新しいかたちの起源」(898) とし，第 2 のウォーナーとなるべく多くの「模倣者」(898) が存在していると言及していることからも明らかのように，『広い，広い世界』の斬新なスタイルは，1850 年以降に出版された女性作家による作品の傾向に大きな影響を与える結果を招いた。

V

大衆文化の幕開け，そして男女の領域を明確に区切った 19 世紀という時代，さらにそのなかで生まれた「エチケットブック」や雑誌を分析し，それぞれの指導書としての，また娯楽としての要素が『広い，広い世界』のなかに確実に生きているということから，この作品のベストセラーの要因は，ある面においては，現代の多くのウォーナー研究者たちが主張するように，19 世紀という時代によって助けられたということを，あらためて認識できた。だが，文学としての『広い，広い世界』の価値を再考察するために，内容を深く分析した結果，このような社会的な要因は，やはり外的な要因に過ぎないことが明らかになった。

確かに『広い，広い世界』は，大まかには「エチケットブック」や雑誌が唱えていた女性のあるべき姿を明らかにした，指導書的な要素が多く含

まれているが，そこには「エチケットブック」や雑誌にはない，作品独自の，読者を魅了する要素が内在していたのである。それは，1) 作品が『聖書』をわかり易く解説した「わかり易い聖書」として存在したこと，2) 読者も共感できる現実世界のありふれた生活を忠実に描写したこと，3) ヒロイン，エレンが「欠点だらけ」であり，彼女のいくどにも及ぶ失敗，そして反省の繰り返しを通し，読者に再三「善良に」生きることの難しさを教えていることである。本稿においては，これらを裏付ける様々な実証から，外的要因の裏には作品自体の内容もベストセラーの要因に大きく貢献していることを確信できた。

現在ベイムが述べるように，頼るべき男性の不在のために生活の保証を奪われた女性たちが，生き延びるための術として，職業作家という道を選び，結果，芸術性よりも「大衆うけ」する作品が多く世に出回ったという事実 (32) は完全には否定できない。だが，今回『広い，広い世界』のベストセラーの要因の内的な部分を明らかにすることによって，そこで駆使されている様々な手法から，作品を単に芸術性のない物語として位置付けてしまうのはあまりにも早過ぎる結論であるとも考えられはしないであろうか。

注

1 引用部分の日本語訳は，すべて拙訳。

2 次の文献からの引用は，括弧内にそれぞれの省略記号と項数を記して表示。

A	Afterward. *The Wide, Wide World*
BS	*Golden Multitudes*: *The Story of Best Sellers in the United States*
BW	*The Bonds of Womanhood*: "*Woman's Sphere*" *in New England, 1780-1835*
IH	"Ideal Husbands; or, School-girl Fancies"
M	*Manners; or, Happy Homes and Good Society All Year Round*
P	"Passionlessness: An Interpretation of Victorian Sexual Ideology, 1790-1850"
SD	*Sensational Designs*: *The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860*
WT	"What to Teach"
WWW	*The Wide, Wide World*

3 Elizabeth Wetherell。出版当初のウォーナーのペンネームである。女性が職業作家として執筆活動を行うことに否定的な観念を抱いていた 19 世紀においては，多くの作家たちが自らの素性を隠し，ペンネームを使っていたようである。

資料

Fig.1. 『ゴディーズ・レディーズ・ブック』に掲載されたファッション挿絵

Fig.2. 屋根裏の豚の薫製を目の当たりにし，倒れ込んでしまうエレン

引用文献

Alcott, William. *The Young Man's Guide.* 10th ed. Boston: Perkins, 1836.

Baym, Nina. *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America, 1820-70.* 2nd ed. Urbana and Chicago: U of Illinois P, 1993.

Bloch, Ruth H. "American Feminine Ideals in Transition: The Rise of the Moral Mother." *Feminist Studies* 4 (1978): 101-26.

Bunyan, John. *The Pilgrim's Progress.* 2 vols. 1678-84. Oxford: Oxford UP, 1998.

Burt, Olive. *First Woman Editor: Sarah J. Hale.* 3rd ed. New York: Julian, 1961.

Cott, Nancy F. *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England. 1780-1835.* Stoughton: Alpine, 1977.

---. "Passionlessness: An Interpretation of Victorian Sexual Ideology, 1790-1850." *Signs* 4.2 (1978): 219-36.

Damon-Moore, Helen. *Magazines for the Millions: Gender and Commerce in the Ladies' Home Journal and the Saturday Evening Post, 1880-1910.* Albany: State U of New York P, 1994.

Dobson, Joanne. "The Hidden Hand: Subversion of Cultural Ideology in Three Mid-Nineteenth-Century American Women's Novels." *American Quarterly* 38 (1986): 223-42.

Douglas, Ann. *The Feminization of American Culture.* London: Papermac, 1996.

Fern, Fanny. *Ruth Hall: A Domestic Tale of the Present Time.* New York: Penguin, 1997.

Finely, Ruth E. *The Lady of Godey's: Sarah Josepha Hale.* Philadelphia: Lippincott, 1931.

Foster, Edward Halsey. *Susan and Anna Warner.* Boston: Twayne, 1978.

Fuller, Margaret. *Women in the Nineteenth Century.* New York: Dover, 1999.

Geary, Susan. "The Domestic Novel as a Commercial Commodity: Making a Best Seller in the 1850s." *Papers of the Bibliographical Society of America* 70 (1976): 165-95.

Gutjahr C, Paul. *An American Bible: A History of the Good Book in the United States, 1777-1880.* Stanford: Stanford UP, 1999.

Hale, Sarah J. *Manners; or, Happy Homes and Good Society All Year Round.* 1866. New York: Arno P, 1972.

---. *Woman's Record; or Sketches of all Distinguished Women, from the Creation to A.D. 1854. Arranged in Four Eras.* New York: Harper, 1855.

Hart D, James. *The Popular Book: A History of America's Literary Taste.* London: U of California P, 1950.

Hawthorne, Nathaniel. *The Letters, 1853-1856.* Ed. Thomas Woodson, et. al. Columbus: Ohio State UP, 1987.

Kim, Sharon Y. *Epiphany and Character in the Novel: 1850-1930.* Diss. Yale U, 1999. Ann Arbor: UMI, 1999. 9930999.

Mond, Adolphe. *Woman: Her Mission and Life.* New York: Blakeman, 1858.

Mott, Frank Luther. *Golden Mutitudes: The Story of Best Sellers in the United States.* New York: Bowker, 1947.

---. *History of American Magazines: 1741-1850.* New York: Appleton, 1930.

黛道子　「『グレアムズ・マガジン』の女性寄稿者たち」野口・山口 229-51.

Neal, Joseph C. "Ideal Husbands; or, School-girl Fancies." *Godey's Ladies' Book* 40 (1850): 24-31.

野口啓子　序論「ポーと雑誌文学」『ポーと雑誌』9-31.

野口啓子・山口ヨシ子　編『ポーと雑誌文学—マガジニストのアメリカ』彩流社 2001.

Okker, Patricia. *Our Sister Editors: Sarah J. Hale and the Tradition of Nineteenth-Century American Women Editors.* Athens U of Georgia P, 1995.

Papashvily, Helen Waite. *All the Happy Endings.* New York: Harper, 1956.

Plante, Ellen M. *Women at Home in Victorian America: A Social History.* New York: Facts on File, 1997.

Reynolds, David S. *Faith in Fiction: The Emergence of Religious Litetrature in America.* Cambridge: Harvard UP, 1981.

佐藤宏子　『アメリカの家庭小説—十九世紀の女性作家たち』研究社 1987.

Schlesinger, Arthur M. *Learning How to Behave: A Historical Study of American Etiquette Books.* New York: Macmillan, 1947.

Smith, Susan Belasco. Introduction. *Ruth Hall: A Domestic Tale of the Present Time.* By Fanny Fern. New York: Penguin, 1997. xv - xlv.

Spring, Gardiner. *Excellence and Influence of the Female Character: A Sermon, Preached in the Presbyterian Church in Murray-Street, at the Request of the New York Female Missionary Society.* New York: Seymour, 1825.

Tompkins, Jane. Afterword. *The Wide, Wide World.* By Susan Warner. New York: Feminist, 1987.

---. *Sensational Designs: the Cultural Work of American Fiction, 1790-1860.* New York: Oxford UP, 1985.

Warner, Susan. *The Wide, Wide World.* New York: Feminist, 1987.

Warren, Joyce W. "Profile of Fanny Fern." *Legacy* 2 (1985): 54-60.

Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood: 1820-1860." *American Quarterly*

18 (1966): 151-74.
White, Isabelle. "Anti-Individualism, Authority, and Identity: Susan Warner's Contradictions in The Wide, Wide World." *American Studies* 31.2 (1990): 31-41.
Willard, Emma. "What to Teach." *Godey's Ladies' Book* 45 (1852): 295.
The Wide, Wide World. Advertisement. *Godey's Ladies' Book* 42 (1851): 202.

図版出典一覧

Fig.1. *Gode's Ladies' Book* Feb. 1850
Fig.2. Warner, Susan. *The Wide, Wide World.* New York: Feminist, 1987.